



【連載】5月定期 ツインマーマン：歌劇「白いバラ」③

過去からの声に耳をすませ

白バラが問いかけるもの

武井彩佳 (ドイツ現代史／学習院女子大学教授)
Text by Ayaka Takei

1943年2月18日、午前11時。ミュンヘン大学構内。まだ講義は終わっていない。あと数分もすれば授業を終えた学生の声が響くホールにも人影はなく、大理石の空間はひんやりとした静寂が支配している。その時、吹き抜けになったホールの上階から、無数のビラがひらひらと舞い落ちてくる。「学友諸君！」ビラは呼びかける。「我々はドイツ国民のすべての名において、アドルフ・ヒトラーの国家に要求する。個人の自由を返せ。これこそドイツの最も貴重な財産であり、奴が卑劣極まりない方法で我々からだまし取ったものなのだ」。

すべてのビラが床に落ちるか落ちないかという時、教室のドアが開き学生が流れ出てくる。それに紛れて立ち去ろうとする男女に「待て！」という大声が響き、パタパタと用務員の足音が追う。ミュンヘン大学生を中心とした反ナチグループ、「白バラ」の中心メンバー、ハンス・ショルと妹のゾフィー・ショルが拘束された瞬間である。

人間には、一瞬の判断で行動して、後で深く後悔することがある。なぜそのようなことをしたのか、後から考えてもよく分からないという経験は誰にも少なからずあるだろう。ゾフィーは、3階の手すりの上に置かれたビラの束を、去り際に突き落としたのだった。彼女は自分の軽はずみな行動を、後で後悔したのだろうか。降ってくるビラが目撃されなければ、兄妹はこれまでのようにビラを床や階段に置いて立ち去り、これを手に取った学生にざわめきが広がるのを遠くから確認できたかもしれない。それとも、油断と慢心があったのだろうか。それまでも『白バラ通信』と銘打った反ナチ文章を各地に何百通も郵送していたし、闇夜に紛れて市内で「打倒ヒトラー」「自由」などと壁にタールで落書きしても、捕まらなかったのだから。

ふたりはそのままゲシュタポの尋問に連行され、翌日、メンバーのひとり、クリストフ・プロープストも捕まった。逮捕時

過去からの声に耳をすます——白バラが問いかけるもの

にハンスは、プローストが書いたピラの草稿を持っていた。昼夜を問わぬ尋問は続き、シオル兄妹は自らの関与を自供した。3日後、ベルリンから狂信的なナチ裁判官、民族裁判所のローラント・フライスラーがミュンヘンに到着した。1943年2月22日、民族裁判所が開廷し、フライスラーは3人に「声が裏返ってしまうほど」あらん限りの罵倒を繰り返した後、「反逆罪」「国防軍攪乱」などでシオル兄妹とプローストに死刑判決を下した。同日17時、上告の権利さえも認められないまま、3人の斬首刑が執行された。その後も白バラのメンバーの逮捕は続き、最終的に7人が死刑執行、多くが禁固刑を受けた。

白バラ事件は、ハンスやゾフィーが望んだようには、ドイツ市民の間に反ナチの抵抗運動を広めることはなかった。すでに10年にもなっていたナチ体制の下では、教育、労働など生活のあらゆる局面にまでナチズムは浸透しており、社会における人と人とのつながりは断ち切れ、個人はばらばらにされてナチ国家と「忠誠」と「奉仕」で直接結びつけられていた。1942年末のスターリングラードの戦いでドイツ軍が大きな犠牲を出して退却してからは、先行きに暗雲が立ち込め始めた感があったが、シオル兄妹が考えたようには、学生の間には蜂起への機運など生まれていなかった。まだ多くの国民はヒトラーの忠実な従者であり、むしろ東部戦線に従軍した学生を含む若者が、このような事件を起こしたこと

に驚愕し、命を賭けて戦う兵士の士気を崩すや憤慨した。戦況も芳しくない上に、連日爆撃を受けていたが、「総統」に最後までついて行くしかない人々は思い込まされていた。皆が忍従していると感じていたからこそ、半人前の学生による異議申し立てに、多くが怒りを感じたのであった。

結局、ドイツ人による抵抗運動が独裁を内側から崩壊させることはなく、1945年5月の軍事的敗北をもってしか、犯罪的な体制の歯車が止まることはなかった。そのときに初めて、ドイツ人は自分たちの戦争がもたらした惨禍を突きつけられた。600万人のユダヤ人が殺害され、ドイツに殺人者の烙印が押された。都市は廃墟であった。国は連合軍に分割占領され、前代未聞の犯罪の責めを負う、自信喪失の戦後が始まった。

そうであったからこそ、戦後、白バラによる抵抗運動の事実は、ドイツの誇りを救う数少ない事例であるように思われた。ドイツ人は皆ナチではなかった、良心の声に従い信念に命をささげた者もいた——こうした語り、ハンスやゾフィーたちの犠牲を神話化していった。

現実には、白バラのメンバーは英雄でも、共産主義者のような政治的闘士でもなく、皆ごく普通の若者であった。背伸びをして政治談議もするが、楽しいことも好きで、仲間を大切に、同世代の若者と何ら変わるところがなかった。しかし「これはおかしい」と思ったことを率直に言葉に

過去からの声に耳をすます——白バラが問いかけるもの

した。当たり前なことがきわめて困難な時代に、当たり前であるからという理由で、行動に移した。ハンスは書いている、「僕はちっぽけで弱い、正しいことをしたいのだ」。こうして彼らの行為は良心と徳のなせるわざとされ、その「無垢」な犠牲はより高きものへと昇華された。

ナチズムの過去を克服するための長い時間を経て、ドイツは自らのアイデンティティの強化のために白バラの「神話」に頼る必要もなくなった。白バラが示したような市民的な勇気が教育の根幹に据えられ、強固な民主主義が育った。今やドイツは世界で最も独裁政権が生まれにくい国となったと言ってよい。ドイツの学校の多くは、白バラのメンバーの名前を校名に頂いている。そこには子供たちの一人ひとりが、白バラの理念の継承者であってほしいという願いが込められている。

今年は、白バラ事件からちょうど75年目にあたる。これだけ長い時間が経過しても、ゾフィーたちの言葉は私たちの心を揺さぶり続ける。しかし同時に、彼らが示した勇気は、私たちがどこか落ち着かなくさせる。なぜだろうか。

実は私たちの日常は、小さな勇気が試される場面がいっぱいだ。学校ではいじめ、会社では過労死するほどの労働、理不尽さ、そして政治の腐敗。おかしいことが普通にまかり通るような社会であるとすると、それを容認してきた自分にも責任があると白バラは言った。

しかし人間は、群れの中になると心地が良いのだ。群れは群れの論理で動き、それに従う限りにおいて守られる。群れを出るのは怖い、ひとりで流れに逆らうくらいなら我慢したほうがいい、と私たちの中の声が言う。しかし、実は群れが断崖絶壁に向かっていたらどうするのか。大声で危険を知らせ、群れの向きを変える者が要るのではないのか。ところが、声を上げる者はいつも、「黒い羊」としてはじき出されてきた。他でもない自分が、黒い羊になって矢面に立つ理由はあるのか——こうして群れは安心したまま、断崖まで突き進んでゆく。

ゾフィーは書いていた——「安楽さに、群れの中のぬくもりに、後戻りせず」。白バラは私たちに、この世界をより善きものにするために小さな勇気を示せと要求する。過去からの声に、私たちは一瞬どぎつとし、自分が属す群れを少しだけ距離をもって眺めてみる。そうすると、世界はちょっと違った風に見える。そんな時、私たちの横をハンスとゾフィーがビラの入った鞆を抱えて通り過ぎたような気がする。私たちは少しだけ勇気ももらって、心が温かくなったように感じながら、去り行くふたりの背中を眺めている。



ゾフィー(享年21歳)



ハンス(享年25歳)



クリストフ(享年23歳)